



「死」は、大抵の人にとって、恐れ、忌むべきものである。しかし、メキシコではとらえ方がちよつと違う。国内各地で、死の象徴であるガイコツを見掛けるのだ。だがそれは、おどろおどろしいものではない。陽気で親しみのあるガイコツといった趣だ。

そんなガイコツがメキシコ中に溢れる日がある。それが、11月1日、2日の「死者の日」。一般的に、1日には死んだ子どもの霊が、2日には大人の霊があゝの世から戻ってくるといわれている。霊を迎えるために、各家庭や公共の施設では花や果物などで飾られた「オフレンダ」と呼ばれる祭壇が設けられ、お菓子屋の店先にはチョコレートや砂糖で作ったドクロが並ぶ。

「死者の日」は、スペイン人が持ち込んだカトリック教と先住民の信仰が混ざって生まれたメキシコ特有のものだが、中央部・パツクアロ湖に浮かぶハニツイオ島には先住民の習慣が色濃く残っている。ここでは1日の夜、オフレンダを墓場まで持ち込み、女性と子どもたちが、戻ってくる霊と一夜を過ごす。毛布にくるまり、寒さに耐えながら、彼女たちは亡くなった愛しい死者とどんなことを語り合っているのだろうか。

春

夏

秋

冬

14

11月1日・2日 死者の日

帰ってきた霊と 過ごす一夜

メキシコ
MEXICO



文・写真=篠田 有史

フォトジャーナリスト。1954年岐阜県出身。スペイン、ラテンアメリカを中心に市井しせいの人々を撮り続けている。共著に『コロンブスの夢』『居場所をなくした子どもたち』など。